

# “鬼”のいる里, いない里

—青鬼伝説から—

The Sato Village where there is “Oni” and not to be.  
—from the legend of the sato village Aoni, Hakuba—

林 鎮 代\*  
Shizuyo Hayashi

## 抄録

民話など昔話に登場する“鬼”は、山奥に住まい、村に来ては食べ物や財産、娘をさらっていく悪しき存在であることが多い。しかし、筆者の『『読みがたり』』に登場する“鬼”<sup>1)</sup>には「鬼の田植え」のように、“善い鬼”が登場する話もある。そして、青鬼集落にも“善い鬼”の話が伝えられている。“善い鬼”の話は、非常に稀な例である。“善い鬼”は、どのような事情で生まれたのか。人間と鬼の関係性は、どのようになっているのか。また、子どもには、何を伝えているのかを探った。

## Abstract

In a lot of cases, “Oni” (demon), which appears on folk tales, is considered wicked who steals food, possessions, daughters and so on, falling sometimes on the mountain village and living in the heart of a mountain. However, the good “Oni” appears on “The rice planting by Oni,” introduced in Hayashi, “Oni” which appears on “Yomigatari”. Generally, the story of good “Oni” is very rare. The story of good “Oni” is told in the colony of Aoni, Hakuba, too. The talk of “a good demon” is a very rare example. In what kind of situation was “the good Oni” born? What has the relationship of human beings and Oni become? Also, this paper explored what is taught to the child.

## I. 研究の背景

民話など昔話の中に登場する鬼は、「鬼退治」の言葉もあるように人間が退治すべき対象となっている場合が多い。大人は子どもに昔話を語る中で、鬼は人間とは相いれない存在であることを繰り返し知らせてきた。筆者の「象徴としての“鬼”と“トッケビ”」<sup>2)</sup>にあるように、「子ども達に「どのように“鬼”と戦い、あるいは逃れるべきか」という手本として伝えられた。そして、

---

\* 関西国際大学教育学部

子どもには、長じては人々のために“鬼”に立ち向かうような力と勇気を持った桃太郎や一寸法師のような大人となることが期待され、力のない幼少期には老人のように知恵をもって“鬼”から逃れるようにと、事例としての昔話が語り継がれてきたと考えられる。」のである。しかし、そうした視点で語られてきた鬼の昔話の中で、稀ではあるが善い“鬼”の話も存在している。「読みがたり ○○の昔話」47巻<sup>注1</sup>に、1話のみそうした話があった。新潟県に伝わる「鬼の田植え」<sup>注2</sup>（内容：夜のうちに田植えを手伝う鬼が、朝人間に見つかり慌てて岩に顔をぶつけて青アザを作り青鬼になった。）である。それにより、新潟県では節分には「鬼は内」というようになったといわれている。こうした善い鬼の話が伝えられていることを筆者は「共存とまではいかななくても、“鬼”への感謝の気持ちを表した貴重な話である。北陸の厳しい自然の中で、貧苦や飢饉などの労苦や様々な哀しみの絶えなかったと考えられる農民は、“鬼”の生きていく苦労や報われない悲しみを我が事のように理解したのではないであろうか。」<sup>1)</sup>と、述べている。

ところが、善い“鬼”は長野県白馬村にも存在していた。青鬼（あおに）集落の青鬼（あおに）神社に祭られている「善鬼（ぜんき）大明神」である。“鬼”は悪いものと言われてきた中で、善い“鬼”とは、どのような謂われで誕生したのであろうか。新潟県の「田植え鬼」と青鬼集落の「善鬼大明神」に共通するものはあるのか。また、善い鬼とは、子どもにどのような意味を持って語られ、子どもはそれをどのように受け止めてきたのか。青鬼伝説を中心にこれらを探った。



図1 青鬼集落（白馬村教育委員会「青鬼集落」パンフレットより）

子どもにどのような意味を持って語られ、子どもはそれをどのように受け止めてきたのか。青鬼伝説を中心にこれらを探った。

## II. 青鬼（善鬼大明神）



図2 青鬼集落（白馬村教育委員会「青鬼集落」パンフレットより）

### 1. 青鬼集落

「善鬼大明神」を祭る青鬼神社は、青鬼集落にある。青鬼集落は、図1に見るように長野県白馬村にある。北に岩戸山を、左に物見山や八方山を見る山の中腹にある。平成12年に文化庁より「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されており、14戸の兜造り<sup>注3</sup>の屋根をもつ大きな家屋のある集落である。図2に見るように、集落の北と東に縄文時代中期・後期の善鬼堂遺跡、馬場遺跡があり、古くからの伝統を受け継いでいる村と言える。村は林業と麻の栽培、養蚕等で栄えていたうえ、村を貫く道は善光寺参りの街道でもあったことからその生活は白馬村よりも豊かであったという。雪深い山奥で暮らす村人たちは、何事も協力して助け合って暮らしてきた。1860年～1863年には、青鬼沢の上流から水田に水を引くために全長3キロメートルにもおよぶ「青鬼上堰」<sup>注4</sup>を村人たちだけで開鑿した。田を開鑿した時に掘り起こされた石は、田の廻りに石垣として積みられ、図3にあるように美しい柵田が作られた。この柵田は平成11年に環境庁より「日本の柵田100選」に認定されている。このように歴史ある美しい集落であるが、現在では14世帯20人が10戸に住むのみとなり、平均年齢は75歳となり子供は1人もいなくなってしまったという。その老人達が力を合わせて農業や祭りの伝統を守ってきているが、青鬼の区長であり保存会長でもある降旗氏を始めとして、彼らの元



図3 青鬼集落の柵田

気さに驚かされた。青鬼集落や青鬼上堰を守っていかうとする気概や使命感に依るのであろうか。若い世代は子どもと共に下里（したざと）と呼ぶ麓の町に移っていったが、紫米の収穫期や9月の例大祭には子ども世帯が訪れ、村はにぎやかさを取り戻す。

## 2. 青鬼集落の祭事

近頃では、故郷の祭事は帰省する子孫に合わせて休日や祝日に変更する地域が多くなっている。しかし、青鬼集落の祭事は曜日や祝日に関係なく、毎年決まった日付で行われている。現在10戸となった計20人の村人が、力を合わせ青鬼の伝統を守っている。

表1 青鬼集落の祭事

祭事	祭事の内容	備考（聞き取り等）
春祭り 6月11日	村の裏山に「三峯さま（三峯神社）」を藁で社を作り、宮司と共に祈禱を挙げる。ここでは村人の代表者が参加し、その後、青鬼神社に詣で神楽殿で直来をし、村人全員に札分けが行われる。	札分けするお札は、秩父の三峯神社に代表者がお参りしていただいた札を村の三峯さまに納め祈禱したもの。札は「三峯神社盗賊除御守護」「三峯神社火防御守護」「三峯神社諸災除御守護」の3種類がある。毎年、三峯さま（三峯神社）を村の裏山の場所に設定するのは何故か、との質問の答えは次のようであった。「（村人はいつも外に出ているので）三峯さまは、番犬のように外で守ってくれる。（だから）三峯神社を外に藁で作るは、昔から当たり前のこと。」（青鬼集落の保存会長 降旗隆司氏：談話）
夏祭り 7月23日	集落の裏山奥にある大きなホウノキを「秋葉さま」として祀り、御神酒をかけて集落の（火事からの）無事を祈る。	明治42年7月に大火事が起こり、9戸が消失した事から始まる。豊かな村であったことから、直ちに9戸は再建された。
青鬼神社 例大祭 9月20・21日	1年で最大の祭り。以前は持ち回りで各家で行ったが、現在は「お善鬼の館」で20日夜に「火揉み」（檜の板の穴に、コウゾの棒を差し込んで回転させ火をおこす）をする。火は、蠟燭・提灯・燈籠に移され神社に奉納される。翌21日は、本祭りである。青鬼神社で神事と直来がされる。夜になると、火揉みの火で花火が奉納され、打ち上げられる。	花火の火薬の調査も、戦前までは村人が行っていた。村の神事として、一致団結し統制が取れていたことが伺える。 祭りの全てが厳かな儀式であり、子どもに少しでも任せられることはなかった。子どもは、固唾を吞んでじっと見守っていたようである。「全部大人がやった。子どもは何もせん。」「善い鬼は、青鬼と決まっている。」（前出 降旗隆司氏：談話）
秋祭り 10月29日	青鬼神社に御神酒を奉納し、秋の収穫と健康や安全の感謝と来年1年のいやさかを願った。	集落の外からの客はなく、村人達だけでお参りする。

## 3. 青鬼伝説

青鬼神社に纏わる伝説には、さまざまなものがある。県の公認の説もあれば、村人の語る説もある。それぞれの話に、謂われがあるのであろう。1200年前に亡くなったといわれる青鬼を見た人は、現在では誰もいないはずであり、囲炉裏端で語り継がれてきた話も家々によって多少の差異はあったと考えられる。聞き取った話や調べた話の概要は、次のようであった。

伝説1 （長野県：監修DVD「暮らしが息づく風景 白馬村 青鬼」より）
青鬼集落と岩戸山を隔てた鬼無里村に、鬼のような大男がやってきて村人を苦しめていた。村人は、この大男を岩戸山の底なし穴に閉じ込めた。暫らくすると、鬼無里村の北にある戸隠村で、鬼のような大男が村人を助け喜ばれていた。村人たちは、その大男が穴をくぐりぬげる際に魂が入れ替わったと考え、それ以来この大男を「お善鬼様」として崇めるようになった。

(分析・考察)

「鬼のような大男がやってきて村人を苦しめていた。村人は、この大男を岩戸山の底なし穴に閉じ込めた。」とある。筆者は「“鬼”の性別についての一考察」<sup>3)</sup>の中で「期待に添わない存在であった場合には、生活の場を奪われ追われる、迫害を受ける、殺される可能性があることを伝えている。」と述べている。村から排除すべき存在が“鬼”とされるのは、“人間”に対しては通常行われぬ行為をするためである。この話での行為は、「底なし穴に閉じ込めた」というものである。こうして、村人は鬼の居ない村、すなわち鬼無里村を誕生させたのである。鬼のいない村は、初めからいなかったわけではなく、いなくさせた村であった。ところが、岩戸山の底なし穴に閉じ込めたはずの大男が戸隠村に表れたという。しかも、大男は村人を助けて喜ばれているという。鬼無里村の村人にとって、自分たちが排除した“鬼”が、その大男と同一人物であっては困る。排除は誤りであったと、非難されることになる。それは、鬼を受け入れた村とされる戸隠村の人々にとっても同様に困ることである。そこで、「その大男が穴をぐりぬける際に、魂が入れ替わったのだ」として、大男と鬼を別人として扱うことで、鬼無里村も戸隠村も立場を守ったと考えられる。

伝説2 (青鬼集落のおばあさんからの聞き取り)

1200年前から青鬼集落はあった。山奥にほら穴があり、そこには鬼がいた。祝言などで村人が集まり食事をするときの椀を貸してくれたので、善い鬼「善鬼さん」とあがめていた。

善鬼さんの穴は山奥にあり、村人が日常的に参りをすることはできなかった。その代わりに、村近くにあった諏訪神社の分社にお参りしていた。明治の頃に、その神社を「青鬼神社」と命名(名称変更)を許可してもらった。青鬼のほら穴は鬼無里まで続いていた。ほら穴に入ったら、出たところが鬼無里だったという。

(分析・考察)

青鬼集落にとって伝説2の大男は、“鬼”であった。これは、青鬼集落が縄文時代中期・後期の善鬼堂遺跡・馬場遺跡などが存在するように、古くから生活の場としての歴史があったことと関係があると考えられる。他の村落と比べれば多少は生活が豊かであったであろう青鬼集落では、山奥のほら穴に住む男は“鬼”と認識された。しかし、必要時に椀や膳を貸してくれるのは、“鬼”であっても善い“鬼”である「お善鬼さん」であった。鬼無里村の鬼と青鬼集落の「お善鬼さん」が同一であるとして繋がったのは、「青鬼のほら穴は鬼無里まで続いていた。ほら穴に入ったら、出たところが鬼無里だったという。」という部分からである。鬼無里村の「底なし穴」は、岩戸山の下を通して山奥に抜けられる長い洞窟であったようだ。

伝説3 (白馬村教育委員会:「青鬼集落」パンフレットより「お善鬼様伝説」<sup>4)</sup>)

青鬼の岩戸山には、お善鬼様という神様が祀られている岩屋がある。村の人たちは恐ろしい神として畏れていたが、とある夫婦は、自分たちが貧しくとも健康であるのは全てお善鬼様のお陰と、お善鬼様をうやまっていた。ある年、この夫婦の家が村の寄り合いの当番となったが、貧しくて料理を盛るお膳やお椀がない。そこで、お善鬼様をお願いをしたところ、立派なお膳やお椀を人数分貸してくれた。それ以来、村人はお善鬼様のありがたさを感じ、お善鬼様を大事に祀るようになった。そして、村の家で寄り合いがある度に、お善鬼様からお膳やお椀を借りるようになった。

(分析・考察)

この話では、「青鬼の岩戸山には、お善鬼様という神様が祀られている岩屋がある。」とあり、青鬼は既に神様として祀られている。しかし、「恐ろしい神として畏れていた」というのは、神様が“鬼”であることから「悪さをしないで、村を守ってください。」という意味合いがあったと考えられる。ここでは、「自分たちが貧しくとも健康であるのは全てお善鬼様のお陰と、お善鬼様をうやまっていた。」という夫婦が登場している。

「お善鬼の館」にあるDVDにも同様の話が収録されており、それによればこの夫婦は日々お参りしては岩屋を掃除していたという。そこで、お善鬼様はこの夫婦に膳と椀を貸し与える。このうわさは村中に広まり、村人の皆もお善鬼様をうやまうようになり、膳と椀を借りるようになった。しかし、ある時、返した膳と椀の数が足りなかったことから、もうお善鬼様は貸してくれなくなったという。白馬村教育委員会の「青鬼集落」パンフレットに掲載されている「お善鬼様伝説」と青鬼集落のおばあさんから聞き取った話では、この結末は語られていない。昔話は、冬の囲炉裏端で、農作業の一休みの畦で、語り継がれてきた。その話も話し手の記憶や考えにより、また話す相手により、家々によって多少の違いはあったのであろうと考えられる。



図4 青鬼神社への道



図5 青鬼神社

#### 4. 青鬼集落の子ども

現在では、青鬼集落に子どもは1人もいない。学校は、下里（したざと）と呼ばれる山の麓にある。青鬼集落から下里（したざと）にある学校までの距離は、子どもの足で通えるものではない。今では、若い夫婦と子どもは山を下り、紫米の収穫時や秋の例大祭になると山にやってくる。逆に雪の積もる冬は、青鬼集落の老人たちの半数は、山を下りて子どもたちの家に身を寄せる。子どもたちは、冬の間は祖父母から青鬼伝説の話を楽しむのである。

秋の例大祭に、子どもたちは祖父母から聞いた青鬼に会いに山に来る。青鬼神社（善鬼大明神）の神事に、子どもが役割を持つことはない。大人たちが身を清め、神事を執り行う姿を見るのみである。大人たちは交代で勇ましい掛け声とともに火揉みをし、起こした火を慎重に提灯や灯籠に移し青鬼神社に詣でる。また、真剣な面持ちで、お善鬼様に奉納する



図6 青鬼集落にあるハウノキ

花火の火薬を調合する。どれも、子どもに任せられるものではない。山に生活する者にとって、火は貴重であるとともに、危険極まりないものでもある。山火事は絶対に起こしてはならないものであることは、ホウノキを「秋葉さま」として祀る夏祭りのいわれからもわかる。例大祭での子どもは、大人の気迫を全身に感じ、青鬼伝説をイメージしながら、お善鬼さまの存在を感じているのである。

### Ⅲ. お善鬼様（善鬼大明神）が子どもに伝えるもの

例大祭において、子どもが神事に直接にかかわることはほとんどない。大人の神事を遠くから見て、大人の後をついて提灯行列に加わり、大人に守られて花火見物をする。しかし、お善鬼様の存在は、子どもには大きいものであらうと思われる。それは、子どもの家族である大人によって繰り返し大切なものと語られてきたからである。お善鬼様が、子どもに伝えているであらうものを次のように考えた。

#### 〈具体的な生活の知恵と形を超えた精神的な力〉

山に暮らす智恵は、生命の維持や安全には欠かすことはできない。第1には、山の危険性である。山のほら穴には恐ろしい鬼が潜んでいる。うかつに近づくと、怖い目にあうことになる。ほら穴は、たいへん危険であるから、気をつけようと伝えている。第2には、火の危険性である。火は、子どもが簡単に扱ってはならないものである。大人が慎重に扱う様子から、子どもは自然にそうしたことを理解する。それぞれの家の提灯や青鬼神社への道筋にある灯籠に火を移すと、夜の暗闇の不便さや怖さが解消する。しかし、花火に点火すれば、大きな爆発を起こす。火の正体は便利さと危険性を併せ持っていることを、具体的に象徴的に伝えている。第3には、山で生き抜く精神力である。山には、不便さや怖さや危険性が多くある。子どもが山で生き延びていくためには、具体的な知識の他に、精神的な力も必要とされる。恐怖でパニックを起こせば、子どものわずかな知識など直ちに吹っ飛んでしまう。むやみに走れば、崖や穴にも落ちてしまうであらう。イノシシなどの動物が、襲ってくるかもしれない。お善鬼様や三峯さまが守って下さる、と考えたら少しは心強くないであらうか。気持ちが落ち着けば、良い方策も考えられるというものである。

お善鬼様（善鬼大明神）は、怖くもあるが精神的な支えともなっているのではないか。お善鬼様の存在が、子どもに与えるものは、山で生きていくための知恵と勇気である。

#### 〈青鬼集落、岩戸＝鬼無里、雄大な自然の不思議さと繋がり〉

はるかに北アルプスを望む山間部に生活する子どもにとって、岩戸山の向こう側は想像の世界であったであらう。岩戸山の向こう側には鬼無里という村があり、その名の通り鬼のいない村であると聞く。その理由は、鬼が鬼無里村から戸隠村へと岩戸山の下洞穴を通り抜けて行ってしまったからである。子どもは、岩戸山の長い洞穴をイメージする。洞穴は、暗いであらう。曲がりくねっているかも知れない。ジメジメしているに違いない。足下は、滑りやすいであらう。子どもはそうしたことを考えながら、自然の不思議さや雄大さに気付く。遠い鬼無里村と岩戸山と戸隠村と青鬼集落とが、お善鬼様によって繋がっていることに驚く。そして、もっと広く深く今

は知らない何かが繋がっている可能性にも気付く。胸をふくらませ、ドキドキしながら聞く青鬼の伝説から伝わるものを、子どもは確かに受け止めていっているのである。

《山奥に暮らし、生きていくための基礎力》

子どもが、山の生活を安全に充実して過ごすためには、様々な力が要求される。青鬼伝説は、例えば神社参りで足腰を鍛え、神社の掃除のやり方や例大祭の火揉みで火を起こす知識を与え、何より人と協力して生きていく大切さを子どもに伝えている。伝説を聞き、伝説に基づいた例大祭に関わる大人達を見て、子どもは山や鬼と共に生きていく力を身に付けていくのである。

《悪い鬼から善い鬼へ。人も変わることができる》

人は、別人格に生まれ変わることができる。子どもにとって、夢のように素晴らしいことである。子どもは、自分が弱かったり、智恵が足りなかったり、不器用であったりすることを、充分に自覚している。大人に比べ、子どもは自身が未熟で情けない存在であることを理解している。しかし、いつか自分が素晴らしく良い存在へと変貌するであろうと期待している。あの「村人を苦しめていた大男」でさえ「お善鬼様」として、生まれ変わったのである。一度は悪く評価されることがあっても、それは覆すことのできるものであることを知れば、失敗を恐れずに挑戦でき、失敗してももう一度頑張ればよいと思える。

「お善鬼様」は、人生も何度でもやり直しはできるのだよと、励ましのメッセージを子どもに伝えているといえよう。

#### IV. まとめ

昔話に登場する“鬼”は、ほとんどが人間に悪さをするものであった。それゆえに、人間はいつも鬼を憎み恐れ、退治しようとしてきた。“鬼”の話を通して子どもに伝えてきたことが、「鬼と交流してはならない。鬼は退治しなければならない。」というものであったのは、当然ともいえる。しかし、先にあげた善い“鬼”の話「鬼の田植え」や「青鬼伝説」では、それらとは異なったメッセージが伝えられている。村人は相手が“鬼”であっても、受けた親切には感謝の心を表している。そこに共通して伝えられているのは、人としてよりよく生きるための智恵と心である。

昔話について、河合<sup>5)</sup>は「時代や文化の差を超えて、共通する部分を持つ」とその普遍性について述べており、柳田<sup>6・7)</sup>は「児童が楽しんで多くの伝説を覚えてくれなかったら、人と国土との因縁は、今よりはるかに薄かったかも知れません。」と、その地域と伝説の関わりの深さを語り、また「(昔話で時代が明確でない場合が多いのは) 求めて捕われない境涯に身を置いて、夢見ようとしたもの」と、昔話特有の利点について述べている。そして、稲田ら<sup>8)</sup>が、めでたしめでたしで終わる昔話が多いことを「それを聞いた子どもの頭脳には成功回路が組み込まれるのだ。」とし、さらに(昔話は)大人にとってはふる里のように大切なものだ。沖縄の久米島では、死んでいく人の枕元で、今生の別れに昔話を聞かせる習慣が残っていたという。健康も家族も全てを失って死ぬときに、昔話は人類に対する希望のようなものを与えたのだろう。」と、昔話を生涯を通しての人間の心の拠り所として読み解いているのは興味深い。昔話とは、いわば心の故郷といってよい。



こうしたことから、昔話に登場する“鬼”は、善い“鬼”であろうがなかろうが、“鬼”が里に  
いようがいまいが、子どもの心に強いメッセージを送り、人としての生き方を考えることを促し  
ているといえる。

**【脚注】**

注1 「読みがたり ○○の昔話」47巻：2004年から2005年にかけて、以前から地方にあった昔話集（1974  
年頃の初版本）を再編集したもの。各県の小学校教育研究会国語部会・学校図書館協会・民話研究会等と  
名付けられた教育に関係した組織で編集はされていることから、子ども、それも主に児童を対象としての  
昔話の教育的活用を意図として再編集が行われたようである。

注2 新潟県「鬼の田植え」話の概要：夜のうちに田植えを手伝う鬼が、朝人間に見つかり慌てて岩に顔を  
ぶつけて青鬼になった。（良い鬼もいる。それからは節分には「鬼は内」というようになったという）

注3 兜造り：寄せ棟屋根の妻側の下半分を切り取って、開口部を設けたもの。屋根の形が兜に似たところ  
から言う。

注4 青鬼上堰：万延・文久年間（1960～1863年）の4年の歳月をかけて青鬼集落24戸が開削したもの。こ  
れにより開墾された集落の東側の水田を潤す上流の用水路

**【引用文献・参考文献】**

- 1) 林 鎮代：『「読みがたり」に登場する“鬼”』関西国際大学研究紀要第13号 2012
- 2) 林 鎮代：「象徴としての“鬼”と“トッケビ”」－子どもに語る昔話－  
関西国際大学研究紀要第12号 2011
- 3) 林 鎮代：「“鬼”の性別についての一考察」－「読みがたり」に登場する“鬼”の話から－ 関西国  
際大学教育総合研究所 教育総合研究叢書 第4集 2012
- 4) 白馬教育委員会：パンフレット「青鬼集落」
- 5) 河合隼雄：「昔話と日本人の心」岩波書店 1982
- 6) 柳田国男：「日本の伝説」新潮文庫 1977
- 7) 柳田国男：「日本の昔話」新潮文庫 1983
- 8) 稲田浩二・稲田和子編：「日本昔話ハンドブック」三省堂 2001

**【謝辞】**

この研究には、白馬村教育委員会の太田秀樹氏と青鬼の保存会長の降旗隆司氏に、多大な支援  
とご協力を頂き、心より感謝申し上げます。また、伝説を語って下さり、「お善鬼の館」をご案内  
下さった青鬼集落の方々にも感謝申し上げます。